

水戸市は人口約27万人を有する茨城県の県庁所在地で、現在の中心市街地はJR水戸駅北側の台地状のエリアに形成されている。江戸時代の頃、水戸城は那珂川とその支流の桜川によって浸食された舌状台地の先端に位置し、台地の続く西側に武家屋敷（現在の三の丸、南町、宮町、大町など）や町屋（現在の泉町、大工町、金町など）などの城下町が広がっていた。

治水と新田開発

当該台地は馬の背状に狭かったため、現在の水戸駅の南東側の低湿地帯で埋め立て造成工事が行われ、新たな城下町が形成された。以来、台地部を「上町」、低地部を「下町」と称し、水戸城下町は上町と下町に武家地と町人地が存する双子町の構造となった。下町のうち、武家地は現在の城東に当たり、町人地（通称、下町）は現在の本町一帯



治水と新田開発で功績を上げた伊奈備前守忠次の像（道明橋）

た地形で、昔から水害に悩まされていたが、水戸藩の手によって、現在の原形を形作る

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第18回 茨城県水戸市



一般財団法人 日本不動産研究所

下町を流れる備前堀

風情漂う歴史ロードへ一体整備

よつな那珂川沿岸の大規模な開発が行われた。工事の指揮を執ったのは、関東平野の治水や新田開発に携わったことでも有名な伊奈備前守忠次であった。下町及び周辺部の農村に対する用水と干波湖の氾濫による治水対策を目的として、大用業用水路として重要な役割を水の開削が行われたのであ



⑤現在も営業を続けている染物屋 ⑥水をたたえる備前堀



果たしている。

業用水路として重要な役割をの護岸材に御影石が使用され、歩道は温かみと和やかさを感じる大谷石で舗装されている。堀沿いにはシタレヤナギが植えられ、石灯籠とともに大変趣ある風情となっている。春の時期にはたくさんのお花見が楽しめる。また、夏に行われる灯籠流しは地域の一大イベントとなっている。

甦る水辺空間

水辺は、とかく汚濁や荒廃など都市生活のひずみが端的に現れてしまう場所でもあるが、美しい都市空間として人々の生活と調和すること、地域に大きな潤いを与えるものである。

近年、備前堀の歴史を後世に残すための整備事業が行われた。単なる護岸の修復にとどまらず、魅力ある歴史ロードを目指して、沿道との一体

無。

驚くべきことに、この水路は江戸時代から改修を続けながらも受け継がれ、現在も農

残暑がまだ続くが、夕暮れに堀沿いを散歩すると、とてもゆったりとした気持ちになれるのでお薦めしたい。江戸時代の商人町の風情を感じることが出来る貴重な場所としていつまでも残ってほしいと切に願っている。

（水戸支所／不動産鑑定士・植野裕高）

（水戸支所／不動産鑑定士・植野裕高）